

船場フォーラム 2010 「船場 commons を使いこなす」

まちの commons が歴史的都心・船場を変えるか

「船場 commons をいかに使いこなすか」

《パネリスト》	渡邊 紘一	坐摩神社宮司	大阪府神社庁副庁長
	藤原 明	(株)りそな銀行	法人ソリューション営業部アドバイザー
	芝川 能一	千島土地(株)	代表取締役社長
	河端 秀直	(株)日建設計	プロジェクト開発部門 副代表
	森吉 裕志	大阪ガス(株)	近畿圏部 副課長
	高岡 伸一	船場アートカフェ	
	梅澤喜八郎	船場まつり実行委員会	・船場センタービル商栄会
	吉田 正雄	長堀 21 世紀計画の会	理事長
《コメンテーター》	橋爪 紳也	大阪府立大学教授	
《コーディネーター》	嘉名 光市	大阪市立大学大学院准教授	
《総括コメント》	嗚海 邦碩	大阪大学名誉教授	

■司会：只今より、パネルディスカッションに移らせていただきます。最初にパネリストをご紹介します。まず、坐摩神社宮司の渡邊紘一様です。坐摩神社は神武皇后に始まるといわれる歴史と伝統のある神社です。2005 年 10 月、時代劇オペラ「どん・じょばんに ～時は浪華～」の公演を機に「せんば鎮守の杜芸術祭プロジェクト」が結成され、渡邊宮司にはその後も熱心にごこうした文化的活動をサポートいただいています。

続いて、りそな銀行の藤原明様です。りそな銀行はかねてより社会貢献にご熱心で、公開空地や玄関ホール、地下の素晴らしいホールを活用したイベント等を開催されています。藤原様は長期に亘り、地域と関わりのある業務を担当され、本日はその先進的事例をご紹介します。

千島土地の芝川能一様は、船場の有名な芝川ビルを所有する百又の社長でもあり、同ビルの近代建築の特徴を活かし、新しいコンセプトで再生されるとともに、4 階に貸出スペースを設け、さまざまなイベント企画に積極的に取り組んでおられます。「水都大阪 2009」で人気者になった八軒家浜のアヒルちゃんは、芝川社長の発案です。

日建設計の河端秀直様は、これまで多くの都市開発を手掛け、大阪市内の大きなプロジェクトはほとんど参加されてきました。本日は、ご自身の職場のある界隈で、日頃から実践されている都市開発のご経験について、お話を伺えるのではないかと思います。

そして、本日の会場をお借りしている大阪ガスの森吉裕志様です。同社の近畿圏部は、近畿圏の大規模な都市開発プロジェクトに携わり、森吉様のご担当の 1 つが船場です。本日は、ガスビルと地域の関わりなどについて熱く語っていただきたいと思います。

前半にご報告をいただいた高岡様、梅澤様、吉田様にもご参加いただきます。

そして、皆様にお馴染みのお 2 方をご紹介します。コメンテーターは大阪府立大学教授の橋爪紳也先生、コーディネーターは大阪市立大学大学院准教授の嘉名光一先生です。

## 《コモنزの定義》

■嘉名：「コモنز」という言葉は元々、牧場の放牧地や里山など、皆で共有している場所のことでした。農場主は、自分の農場だけで牛を飼っていると餌がなくなってしまうので、共有している場所で草を食べさせ、お互いが得をしながらうまく農場を運営します。



里山も、集落で共有して、燃料や収穫のために利用する場所です。

つまり、私有しているがみんなで使うとか、何人かで共有しているものです。「公共空間」も似たような意味ですが、道路や公園など、もう少し目的がはっきりしています。高岡さんから報告のあった「まちのコモنز」は、私も関わって2008年から始まりました。共有地をつくることで、まちが豊かになればという思いでこの言葉を使いました。

最近、ある人から、コモنزは世界的にもブームになっていると教わりました。昨年、インディアナ大学のオストロム教授という女性の経済学者が、コモنزの研究でノーベル経済学賞を受賞しました。地球環境問題や、リーマンショックに代表される市場主義の限界に際し、社会を豊かで持続可能なものにするために、地域で共同管理する井戸などの資源を共有財産「コモنز」という概念で捉え直し、うまく活用する方法を研究しました。コモنزは、吉田さんのお話にもあったように、義務と責任が伴います。自分だけが得をしようという人が現れると、その仕組みは一気に崩壊します。

実は、船場のまちづくりの中に、コモنزはたくさん育っています。具体的には、前半にご報告いただいた取り組みも、これからお話しいただく取り組みも、全てコモنزだと思います。元々あったコモنزという概念を拡大解釈し、それらを育て、高めていくことで、船場の活性化につなげていく方策について議論を進めて行きたいと思います。

この地域でコモنزをつくり、育てておられる方々に、活動のご紹介を兼ねて、順番にお話しさせていただきたいと思います。最初に、藤原さんお願いします。

## 《各コモنزの取組紹介》

### 事例(1)りそな銀行・REENAL

■藤原：りそな銀行は6年半前、公的資金注入というショッキングな事態を受けて、新しいビジネスモデル、新しい銀行像を追求するため、地域の活性化を目指していくことにしました。銀行はいろいろな企業・大学・行政などとお付き合いがあるので、自らはオープンプラットフォームとなり、それぞれの良さを持ち寄っていただいて地域の活性化をプロデュースすれば、結果として、銀行にも商売の前提ができます。それが「REENAL」(ResonaとRegionalを組み合わせた造語)です。小さいものばかりかも知れませんが、6年半で、400以上の協働先と組み、500以上の施策を積み上げています。



着目しているのは地域の資源です。本日のテーマに沿って空間の事例を挙げると、最初に取り組んだのは、天神橋筋商店街の活性化です。たまたま、商店街にある4店舗で地域

限定の定期預金を扱ったことから、天満天神繁昌亭の情報をいただき、一緒に盛り上げて行こうという話になりました。キックオフイベントとして、堺筋本町の本店にある560人収容のホールで、桂三枝さん、笑福亭鶴瓶さん、桂ざこばさんを招いてチャリティー寄席を企画しました。1人5,000円の寄付を500人集めれば、250万円が集まります。チケットは1週間で売り切れ、無事250万円の建設資金を寄付金としてお渡しすることができました。

その後落語は、私どもにとって非常に大事なコンテンツになりました。落語家さんの悩みは、高齢のファンが多く、もう少し若い人たちにも聞いて欲しいということだったので、ガスビル1階のりそな御堂筋ビジネスソリューションプラザや大阪本店ビルエントランスで、夕方7時半から、会社帰りの人に「大人のたしなみ」として落語を聞いていただく「RAKUGO BANK」を15回以上開いています。また、大阪本店ビルエントランスでナカノシマ大学の一環として、落語とお坊さんの講話のワークショップも開催しました。



大阪本店の講堂で歌舞伎の映画を上演したところ、3日間で2,000人ほど集まったこともあります。ジャズコンサートや、ホールのパイプオルガンを活用した演奏会も、年に2~3回行っています。繁昌亭の時の仕組みを使って、義援金活動も行っています。昨年は、中国四川省の大地震の義援金を募りました。

イベントの帰りにお酒を飲んだり、食事をしたりするのに便利のように、近隣のお店にご協力をいただいて「案内マップを持って行けば1ドリンクサービス」のように、リアルなまちの賑わいづくりにつなげる企画も実施しています。

また、当社の金融教育と、象印マホービンのマホービン記念館、パナソニックの環境教育など、企業のいろいろな教育コンテンツを結びつけ、社会科学の1つのカリキュラム「企業ミュージアム BANK」として実施したこともあります。大阪には、工場見学のできる中小企業、職場体験のできるお店などもたくさんあるので、これらの点と点を結びつければ、面白い展開になると考えています。

私どもも commons の1つとして、企業・地域住民・大学・行政と組んで、いろいろな地域活性化を展開し、皆様のお役に立てる企業になりたいと考えています。

## 事例(2) 芝川ビル・近代建築の活用

■嘉名：たくさんの取り組みを是非、船場のまちづくりと連携していただきたいと思いながら拝聴しました。次に、近代建築はもはや、船場の共有財産として欠かせないものになっていますが、私有財産の近代建築を生かして、まちづくりにご貢献いただいている芝川さんから、取り組みをご紹介いただきたいと思います。



■芝川：芝川ビルは、昨年9月、大阪市都市整備局の「HOPEゾーン事業」の補

助金をいただき、入口の頭上の3つのレリーフを元通りに復元しました。表面だけを張り替えるのではなく、奥までほじくり出すという大々的な修復でした。

近代建築は開口部が非常に小さく、閉鎖的で、一般の人が非常に入り難いという特徴がありますが、一般的な方々に入っただけのよう、テナントを事務所から、店舗・飲食物販等に切り替えていきました。特徴的なのは、この建物は元々、私ども一族の自家用だったため、地下に旧金庫室があり、貸し出していませんでしたが、ここを改造して、Mole Hosoi Coffee というコーヒーショップに出店いただいたことです。



また、4階の事務所部分を撤去して、モダンテラスとして作り直しました。自家用のビルだったため、初期の写真や資料が相当数残っていたので、ほぼオリジナルに近い形で復元することができました。復元工事は常に進行形で、1階ファサードのレリーフを元通りしたほか、この3月には、ゆるんで取れたり、文様がなくなったりしていた内部の手すりを修復しました。なくなっていたものは、金型をつくって元の形通りのものを付け直しました。

4階のモダンテラスの利用状況をご紹介します。高岡さんの発表にあった「まちのcommons」や演奏会、企業の展示会、そして、昨年「International Workshop Festival 200 doors」の会場として使った講師が、近隣にお勤めの女性を対象に、出勤前にリフレッシュしていただくための「朝ヨガ」を定期的開催しています。

昨年末、御堂筋イルミネーションと光のルネサンスの時期に合わせて、近隣の国登録有形文化財に指定されている近代建築の、青山ビル・生駒ビルディング・北浜レトロビルディング・伏見ビル・芝川ビルの5軒と一緒に、船場近代建築のライトアップ「近代建築と光の芸術」を実施しました。この際には、スタンプラリー等も行っています。

### 事例(3) 日建設計・魚の棚筋

■嘉名：続いて、日建設計の河端さんにお話をいただきます。ご存知の方も多いと思いますが、御堂筋から2筋西に入った所に、土佐堀通りから伏見町まで約350m間、巾約6mの公開空地がほぼ連続した形で続く「魚の棚筋」ができ、非常に綺麗な町並みを形成しています。そこに至るまでの経過をお聞かせいただきたいと思います。



■河端：船場地域には、樹が全くない状況が続いてきました。新しいまちをつくる際、これをどうするかということから当プロジェクトが始まりました。魚の棚筋は、澤田さんから紹介のあった淀屋橋 WEST と同じエリアです。25年ほど前は、一般的な船場の町と変わらない状況で、道に沿って駐車場やゴミ置き場がありました。

ご承知のように、船場地区では、昭和14年に船場建築後退線が定められました。しかし、建物が後退しても、空間はなかなか有効利用されてこ

なかったのが現状です。大正時代はまだあまり車が通っていなかったので、道を挟んで店が軒を連ね、どちらかといえば今よりまちに賑わいと活気があったようです。

1980年頃、2つの建物の計画がスタートしました。最初は、船場建築後退線を利用して、緑の潤いあるプロムナードをつくろうと考えました。後退線だけでは樹を植えるには不十分ですが、たまたま、すぐ北側のビルが後退線より控えて建っていたので、その壁面に合わせて、将来的に、この通りにずっと樹が植わることを期待して2つの建物を設計しました。ビルのオーナーも趣旨を理解し、ご協力いただけました。舗装材や照明器具も2つのビル共通で設計し、出来上がった空間はそれなりの評価をいただきました。



他のビルの建て替えや外壁改修の際にも、樹を植えるスペースを確保していきました。住友ビル2号館は、以前は道路沿いに駐車場やタクシーの待機所がありましたが、外壁の改修に合わせて樹を植え、壁面の後退部分の舗装をし直し、楽しく人が歩ける空間にさせていただきました。それが1990年頃にできた後、澤田さんが登場し、いろいろなソフトを重ねて行っていただいたのが、淀屋橋 WEST です。

今橋4丁目にできた「淀屋橋 odona」の西側には、単に緑があるだけではなく、お店を並べてテーブルや椅子を置き、空間を楽しめるようになってきました。ただし、この界隈は当社が設計した建物ばかりではないので、誤解のないようお願いいたします。

船場の1つの街区は複数の建物で構成されているので、1つのビルの建て替えだけで、このような整備ができるわけではありませんが、共通の空間を隣同士でつなげていくことを心掛けていけば、何年か先には、まち全体で実現することは可能だと思います。皆様もご自身のプロジェクトの際には、当社にお声掛けいただけたらと思います。

#### **事例(4-1)大阪ガス・地域の文化ビル**

■**嘉名**：続いて、本日の会場を、まさにコモンズとしても開放いただいている、大阪ガスの森吉さんから、会社の取組みをご紹介します。

■**森吉**：大阪ガスビルは、昭和8年、ガスを使ったモダン文化を紹介するビルとして出発しました。ショールーム、事務所、公演場、料理講習室、そして8階には、創業時のレシピを現在まで守り続けている美味しい食堂があります。他に、美容室、喫茶室もあり、北側に増築した時に、りそな銀行に入っていました。単なる業務ビルではなく、いろんな機能を複合した文化ビルと言ってもいいでしょう。



現在もできる限り、このビルを使っていろんな催しを行っています。ホールで音楽のイベント、1階の御堂筋と平野町通りに面したポルティコ（柱廊）でチャリティーバザー、そして最近では、屋上でスカイランチを、少ないメンバーで試行的にやっています。そういうことが沿道にも広がり、周辺の建物とともに御堂筋活性化に積極的に貢献でき

る取組みを進めたいと思っています。

御堂筋まちづくりネットワークは、御堂筋沿道の企業が中心に加入する団体です。朝の掃除等はもちろん行っていますが、他にも、例えば御堂筋イルミネーションの時は、デザインを手がけた照明家の長町志穂さんをお迎えしてお話をお伺いし、実際に現地でも説明をしていただきました。また、大植英次氏プロデュースによる大阪クラシックには毎年たくさんのお客様にお越しいただき、一昨年は、本日交流会を行う 1 階の会場に 400 人も入るというすごい状態でした。御堂筋 KAPPO でも、本体事業ではありませんが、関連事業として、なにわ伝統野菜の PR なども行っています。



御堂筋まちづくりネットワークでは、ガスビルだけではなく、他の沿道ビルの公開空地でも催しを行っています。皆さんは御堂筋の彫刻をご存知ですか。気がつかない人もおられるようですが、全て本物です。あの彫刻作品を写真に撮っていただいて、よい作品を展示する「御堂筋彫刻写真展」を開催し、あとは絵葉書にしてお配りする活動もしています。

このように、御堂筋の企業でできるだけcommonsを使って、いろいろな取組みをしています。春と秋には、5月と11月を中心に、「御堂筋ギャラリー」という催しを行っていますので、是非お越しください。

#### 事例(4-2)災害時のまちの継続計画

■森吉：ここからは御堂筋に限らない話ですが、commonsの利用の仕方の1つとして、災害時について考えて欲しいと思います。昨年の船場まつりで、船場センタービルの一角をお借りして、災害時の帰宅困難者の問題についての展示と介護の練習をしました。

大阪は、上町活断層がガツンと来たら大変なことになります。働いている人、通りかかった人を含めて、大阪市内で90万人以上、中央区で25万人以上が家に帰れないという事態が起きます。これは大阪市が控えめに見積もった数字で、国はもっと大きな数字を出しています。その時、commonsが別の意味で重要になってくると思います。

大阪の西側の海の方は液状化し、船場、特に御堂筋と中央大通は、東西から人が集まってくる場所になると思います。帰れない人たちをどうするかを、今から考えておかなければいけません。ビジネスのBCP(Business Continuity Planning:事業継続計画)だけではなく、震災以外の時にも役に立つ、まちの継続計画(Town Continuity Planning)にまで拡大して考えると意義があるのではないかと思います。



その中で私が注目したのは、マンホールトイレです。大阪市下水道局が、これから広めていこうとしています。被災時には、マンホールのふたの代わりにこの器具を設置し、段ボール箱など手近なものを使って囲いをつくれば、マンホールがトイレになります。さらに、囲いの壁面を掲示板などのメディアとして、帰れない人がメッセージを張ったり、お世話になった人にお礼を書いたり、

子どもたちが絵を描いて励ますなど、活用できるのではないかと思います。マンホールトイシを、是非公共空間にも導入したいと思います。

それ以外に、備蓄や、場合によっては軒下も一部開放するなど、いろいろな段階で多くの企業が連携して考えていくことを、ぜひ船場でも検討していただければと思います。

### 事例(5) 鎮守の杜・坐摩神社

■嘉名：最後に、昔から日本にある鎮守の杜という共有物、伝統を守りながら文化を育む場所にいただいている坐摩神社の渡邊さんに、取り組みのご紹介をお願いします。



■渡邊：坐摩神社の正式名称は「いかすりじんじゃ」です。古い神様のお名前なのですが、それでは全く読めないの、私どもも「ざまじんじゃ」と申しております。本町の南御堂さんの西の真裏、御堂筋から1筋入ったところにある、1700坪弱の敷地の神社です。

嘉名先生もおっしゃったように、神社は、もちろん宗教上の施設ではありますが、古くから半公共のような存在の場所でした。船場には坐摩神社のほか、御霊神社・難波神社・少彦名神社の4社があります。それぞれ、お寺の檀家にあたる氏子のテリトリー（氏地）が決められており、氏子さんたちのご信仰によって長年存続しています。氏地は今もある程度守られていますが、現在のように価値観が多様化する中、そうばかりは申していただ



けませんし、また、そのままのままであるべきではありません。神社は古くからある公共の場、コモンスの1つの核として存在すべきだと考えています。

3年ほど前、関東の早稲田大学・明治大学・中央大学の人力車クラブの学生さんたちが、御堂筋などで人力車を引きたいが、なかなか許可をもらえないということで、神社の境内を利用して人力車に親しんでもらう試みをしました。屋台なども少し出しました。

5年ほど前、「せんば鎮守の杜芸術祭」実行委員会が組織され、その事業に私どもの神社を無料で開放しています。客席は400くらいつくることができ、昼の部は、地元の文化グループを中心に10団体ほどがいろんな催し物をされます。夜間は、かがり火を焚きながらオペラなどを上演しています。昨年は新型インフルエンザ流行のため開催を見送りましたが、過去4回開催しています。

少し特殊なイベントとしては、秋篠宮家に悠仁親王がお生まれになった時、いろいろな団体からの発案で、坐摩神社の境内を出発点に、難波の高島屋の前まで国旗パレードをしました。もちろんパトカーに先導していただきました。

フリーマーケットも行われています。非常に特殊なことですが、神社でありながら、インド舞踊もやりました。民族楽器の演奏に合わせて絵画のパフォーマンスをするなど、いろんな催しをしました。もちろん無料で開放しております。

以上のようなことはほんの一例ですが、神社でできるいろいろなことを手探りで、少し

でも地域に貢献できたら、また、地域と一体感が持てたらと期待しております。

### 《コモンズ運営の舞台裏》

■**嘉名**：皆様のお話をお聞きして、船場にもたくさんのコモンズがあることを改めて感じた次第です。コモンズはまちを活性化させる非常に重要な要素ですが、一方で、共有地であるが故の難しさもあります。ハーディンさんという生態学者は、『コモンズの悲劇』という論文の中で、コモンズは責任の所在がはっきりせず、まさに資源の枯渇合戦だと言っています。最近でいうと、CO<sub>2</sub> 排出の問題などのように、競争の中で自分だけが得をしようとする人が現れると、コモンズはうまく行かなくなります。

そこで、皆さんが活動の中で苦労している点や、逆にうまくいっているというエピソードなどをご紹介いただければと思います。まず、「船場からの報告」でお話いただいた3名の皆様にお聞きしたいと思います。高岡さんは、町内会の池田会長にもお世話になりながら、多くの方々を巻き込んで最前線で活動を展開されました。いかがでしたか。



■**高岡**：「まちのコモンズ」はいろんな場所を使わせていただけていますが、厳密な意味での公共空間は1つもなく、基本的には私有地です。2年で2回開催し、皆様から大変だっただろう、よくやったなどと声を掛けていただきますが、それほどの苦労はしていません。

1つは、私有地なので、そこを所有している責任者の方が「わかった。一緒にやろう」と言ってくれば、全てクリアになります。また、町内会と一緒に開催しているので、町の中の調整は、事情をよくご存知の町会長さんにご尽力いただいています。例えば、吉兆さんをお願いに行く時も、池田会長が「ほな、行こか」と、こともなげに引き受けていただけだったのですいぶん驚きました。ですから今のところ、大学としてはそんなに苦労はなく、非常に幸福な関係で運営できています。

■**嘉名**：町会とタッグを組んだおかげで、大学だけではできなかったプログラムができた好例だと思います。次に、梅澤さんは「船場まつり」という初めての取り組みの実行委員長をされました。私も何度か実行委員会に参加しましたが、商売人がたくさんおられて、組織も、商栄会だけではなく、区分所有者会や公社、周りの町の連盟などいろいろあって、調整するには大変な苦労があったと思います。1年目の企画を実行してみて、感想やエピソード、裏話などがあれば教えていただきたいと思います。



■**梅澤**：ご指摘のように、いろんな団体や組織があり、考え方も求める方向もそれぞれ違うので、皆様の要望を調整し、まとめて行くのにはすいぶん気を使いましたが、結果としてはうまく行ったのではないかと思います。特に、本日お見えの渡邊宮司さんを始め、南御堂さんや地域の皆さんが、お願いに行くと「地域のためであれば」とご理解いただき、

気持ちよく協力していただけたことを非常に感謝しています。

ただ、事業計画は決まっても、予算の裏づけが取れないので、お金には苦労しました。いろんな団体がいろんなイベントを企画しているので、こちらは必死になってお願いに行きますが、大阪ガスさんなど地元の大きな企業は、イベントごとに寄付を依頼されたらたまったものではないでしょう。政治献金のように、どこかが1本にまとめるのがいいかどうか分かりませんが、資金集めの仕組みをどうして行かか、今後の1つの課題ではないかと思います。

■**嘉名**：コモンズが増えれば増えるほど、お金の負担も大きくなるという重要な問題提起をいただきました。まちとしても考えていった方がいいのではないかと思います。次に、吉田さんに苦労話をお聞きすると2時間半くらいかかるとは思いますが（笑）、梅澤さんの場合と少し違うのは、公共空間である道路で行うプログラムであるという点です。公共空間を使う際の規制の問題等についてお聞かせいただけますか。

■**吉田**：やはりお金が一番の問題です。公共空間なので、金集めに対する規制は相当厳しいのです。参加企業はメセナ的な感覚を持ちながら、当然、自社のPRもします。最近はずいぶん規制も緩和されつつあるので、この方向で何とか官に頼らずお金を集めていく形を考えています。また、寄付に対する税金の問題、アメリカのように、個人が相当な額を出す際の規制も、徐々に規制緩和して行くのではないかと思います。



もう1つ大事な問題は、最初は5000万円かかった予算を、2000万円、1000万円と下げていく工夫です。銀座の歩行者天国は、見たところスムーズにできていますが、1時になったらパトカーが来て道路に横付けし、何もしていません。イベントはまちづくりの役に立てなければ、催しのための催しでは意味がありません。

アメリカ村やヨーロッパ村、いろいろな商店街の皆さん、劇場の方たちもさまざまな催しをしています。大阪には非常にパワーはありますが、それぞれが言いたいことを言い、いざ実行する段になったらなかなか1つにまとまらないという、独特の雰囲気があります。それをまとめて行くのは、行政では無理だし、町内会や振興会でも難しいでしょう。商業ベースならいいですが、ボランティアはなかなか難しいのです。

御堂筋フェスタは4時間の催しですが、我々が担当する一番北の地域は、年間を通じていろんなイベントやコンサートをして、そこで選りすぐられた人が、プロへの登竜門として御堂筋フェスタで発表できるなど、年間計画の最終舞台としての方向付けも考えていますが、統合していくのはなかなか難しいと感じています。

また、公共空間の特色として、あまり有名人が来ると、事故など問題が起きる危険があります。以前、ET-KING を呼んだ時は、大勢が集まりすぎて、警察から警備体制にはじゅうぶん注意するよう指導されました。しかし、学園祭のようなレベルでは人は集まりません。この辺の難しさを感じています。

## 《経験の共有とつないでいくことがカギ》

■**嘉名**：水都大阪 2009 の時も、警備に大きなお金がかかりました。公共空間を活用すると、人が大勢集まることで、お金も手間もかかります。船場にはふんだんにスペースがあるわけではないので、その点をどう解消していくかも課題だと思います。

ここで、橋爪先生に、これまでの話についてのコメント、そして、今後 commons を使って船場を活性化していくにあたり、何か助言やアイデアがあればお願いします。

■**橋爪**：嘉名先生から、commons という言葉が流行っているとお話がありましたが、私はそうは思いません。会場にも、本当は commons を知らない人はもっとおられるはずで

「commons」をめぐって議論をするまちづくりフォーラムは、日本で初めてのことだと思います。大事なことは、commons という概念をこの船場から広めることです。



これまでの話で、皆さんの関わる事業が、みんなのために進めているという自負があるからこそ、それぞれの公共空間の使い方が、ここでいう「まちの commons」であることを、瞬時に理解していただいていると感じました。

一方、今日の主題でいえば、船場 commons を「使いこなす」という点にも大事な意味があります。commons とは、commonsense を一般常識というように、誰もが自分たちの財産だと、常識として判っている「誰もが知っている場所」のことです。先ほどご紹介のあった建築後退線のスペースも、平日の昼間はお弁当屋さんがたくさん出ていたり、あるいは駐車場になっていたと、誰もがそれを当たり前と思っている使われ方がされています。

しかし、本日ご報告いただいた commons は、独特の使い方をされています。自分たちの財産であるその場所について、一般の人がまだ気づいていない使いこなし方を提示し、それで仲間がだんだん広がってきているところかと思えます。

「使いこなし方」が大切ですね。大事なことを 2 つ申し上げたいと思います。1 つは、「経験の共有」です。吉田さんは、オープンフェスタを 10 年かけてここまで育てるのに大変な苦勞をされました。その苦勞があればこそ、後に続く活動は、先例があるが故に、吉田さんのように 10 年かかるものではなく、3 年でできるようになるかも知れません。そして、次のグループは 1 年でできるようになるかも知れない。初めは例外的に認められたことが、やがて、誰もが当たり前のこととしてできるようになるでしょう。こういう経験を、地域の中の人々が共有していくことが大事だと思います。

もう 1 つは、「つないでいく」ことの重要さです。そもそも、船場げんきの会を立ち上げた際、なぜ「元気」というキーワードを用いたのかということ、当時、そう言わなければいけないほど船場に元気がなかったからです。この地域を何とかしたいという思いを持つ人はたくさんいても、全くつながりがなかったのです。現在、22 グループがつながり、一緒に考える場ができました。今日も、元気な人がこれだけ船場にいることを皆さんで共

有できました。

ただ私は、昨年のフォーラムで、「次に大事なものは元気の質だ」と申し上げました。どんな船場にしていきたいかというイメージを持って、横に連携しながら実践していく段階に入っていると思うのです。例えば、私の関わっている御堂筋のイルミネーションは、まだ、澤田さんの淀屋橋イルミネーションと全く連携できていません。吉田さんのご指摘の通り、近い時期や場所でよく似たイベントをそれぞれに実施していますが、ばらばらではパワーになりません。

船場コモンズを使いこなす中から、総力と元気を結集して、経験を共有し、さらに、つないでいきましょう。

### 《船場コモンズの展開に向けて》

■嘉名：ここからは、コモンズを生かしたまちづくりをどうすればいいのか、こんなコモンズもあればいい、これも船場のコモンズと呼んでいいなど、コモンズを使った具体的な活性化のアイデアや、今後の展望について議論を深めて行きたいと思います。橋爪先生から、平日の船場の活性化が課題だのご指摘いただいたと思いますが、いかがですか。

#### ヒューストンの事例から

■橋爪：以前、アメリカのヒューストンで新たに始まった「インターナショナルフェスティバル」を視察しました。都心部で、1週間だけ平日の昼休みを1時間延長し、2時間の昼休みを利用して、広場や通りでイベントやパレードなどを行います。ヒューストン出身で他の都市や外国で活躍している人も、期間中はヒューストンに帰郷し、特別の業務やコンベンションを行うプログラムです。

日本でも、祇園祭や岸和田だんじり祭は、都心部でそういうことができますが、船場のイベントは、アフターファイブか、10月などの土日だけなので、平日だけ船場にいる人はわざわざ来ないと楽しめません。オフィス街では、平日の昼間は各社とも1時間で終わるのが当然で、お祭のシーズンが見えないのが最大の弱点だと思います。平日の楽しい船場も、もっと考える余地があると思います。

#### コモンズとビジネスの関係

■嘉名：船場で、ある1週間だけ昼休みを2時間にすればのなら、できるかもしれませんね。是非やりましょう。

今後、コモンズを展開していくには、多くの人に興味と関心を広げ、仲間を増やしていくことが不可欠です。そこで、藤原さんにお伺いします。企業としてビジネスを基本に活動されている限りは、コモンズにかかるコストや成果が問われると思います。りそな銀行さんが、藤原さんの活動をどう評価しているかお聞かせいただくと、他の企業の関心も高まってくると思います。

■藤原：私どもの REENAL プロジェクトには、予算はありません。関わりのある企業に、持ち寄れるものを持ち寄っていただき、何ができるかを積み上げていきます。CSR やメセナと企業活動は離れたところにあると思われるかもしれませんが、実は表裏一体です。銀行は地域の活性化なしには企業活動を行えません。銀行は硬いというイメージを崩し、先進的な活動として認めていただければ、賛同してくれるところが増えると考えます。

私どもの取引先は何万社もあるので、全てに声を掛けることはできませんが、ある企画に賛同する人を募るような仕組みができれば、お金の集め方も意外とクリアになるのではないかと思います。繁昌亭などは、小口分散型のお金の集め方の良い例だと思います。特に大阪では、そういうやり方でなければ持たないのではないかと思います。

■嘉名：まちとしてお金を集める仕組みを持つべき時代になっているのかも知れません。次に、芝川さんにお聞きします。近代建築を使った活性化イベントや、コモンズを広める活動のほか、水都大阪で一番目立っていた八軒家浜の「アヒルちゃん」も芝川さんの運営でした。芝川さんのような人がもっとたくさん出てくれば、きっと船場はもっとよくなると思いますが、そのような活動を始められた経緯について教えてください。

■芝川：実は、数年前まで、全くそういうことには関心がなかったといっても過言ではありません。本日、この会場にもお越しの方々の熱い思いに打たれ、いろんな理論的な話も



お聞きして、そういうことなら、当社の規模でもやっていたのではないかと考えて始めました。

水都大阪 2009 のアヒル（ラバー・ダック）で言うと、皆さんが想像しておられるほどお金はかかっていません。水の上に浮いているので、期間中の警備費は要りません。ヤノベケンジさんのラッキードラゴンの保存の問題にも関

わっていますが、アヒルの場合は、当社にもともと名村造船のドックが残っているので、そこで保管できます。一応、そういうことを頭の中で算盤を弾いてやっているつもりです。

また、いろいろな活動をしている人から啓発を受けて、お手伝いしている事業もあります。例えば、芝川ビルを会場とするイベントの1つとして、山本能楽堂の山本章弘さんが子供向けの能のワークショップをされています。その時には、当社の社員が行って、近代建築の内部ツアーを行うなど、子供の時からそういうことに親しんでもらう試みもしています。

### ハードとソフトの連携

■嘉名：生駒ビルさんも近代建築についての活動をしています。私たちとしてもどんどん PR して、仲間を増やしていく活動も必要だと思います。続いて、河端さんにお聞きします。25 年を経て、魚の棚筋を中心に充実してきた公共空間を、もっと船場に拡げていくにはどうしたらいいか、アイデアがあればお聞かせ下さい。澤田さんの関わる場所と同

じということですが、まちづくりでは、ハードだけを整備しても「仏つくって魂入れず」です。淀屋橋 WEST は、魅力的なハード空間にソフトが入ることで賑わいが生まれた、連携の好例だと思います。

■河端：25 年前に最初のビルをつくった時は、将来どうなるか、誰も分かっていませんでした。しかし今は、そこに行けば事例を見ることができます。また、土曜日にこれだけの人が集まって、まちづくりを考える機運が盛り上がっているということは、同じようなことがすぐに実現できるということではないかと思います。

船場には間口の狭いビルがたくさんあり、駐車場や駐輪スペースの問題など、実際には難しい面もいろいろありますが、それらの問題を解決する手法も徐々に整備されてきているので、誰かがやろうと言い出したら多分可能だと思います。大阪では、行政が言ってもなかなかついてこないのも、やはり本日ご出席の方々の中から、こんなことをしてみたいという熱い思いを発信していただければ、皆さんに共有されると思います。

魚の棚筋は、最初は 2 つのビルだけでしたが、幾つか同じような空間が出来上がるにつれて、周りの人が自然と、次は自分たちもそうしようと考えようようになります。一例を挙げると、住友ビルの外壁を改修した時、前に樹を植えましたが、地下駐車場があるので、最初の計画では、等間隔でバランスよく樹を植えることができませんでした。すると、それを見た周りの人からなぜだという意見が寄せられ、話し合った結果、ビルのオーナーも間隔を揃えてくれました。

このように、空間が出来上がってくると、多分に、みんながそれを自分のまちとして認識するようになってきます。その第一歩を、まず誰かが踏み出してくれたら、船場の中に次々、同じような空間が出来ていくのではないかと想います。

■嘉名：今、フォーラム実行委員長の千葉さんにお聞きすると、船場に公開空地は概ね 100 余りあるそうです。最近、ある程度の広さの敷地にビルを建てる時は、総合設計制度を使って、使い勝手の良い公開空地をつくるケースが増えています。魚の棚筋のようなものをまちとしてつくるのなら、きっと賛同する人はおられると思います。そういう呼びかけ、きっかけづくりが大事だと思います。もし、ビルを建て替えてみよう、あるいは、町内会で良い歩道空間をつくりたいとお考えの方がおられたら、是非、船場げんきの会にご相談いただければと思います。いろんな可能性を含めてお手伝いできることがあれば、連携していけたらと思います。

■河端：先ほどハードとソフトの連携の話が出ましたが、良い空間がなければ、お店を出す気はなかなか起こりません。逆に、楽しい空間ができれば、樹を植えるは物足りないもので、そこに出席して賑わいをつくろうと、どんどん発展すると思います。魚の棚筋はそれが認知され、お店の方がどんどん集まってくると言う状況になっています。その辺も加味して、皆さんもご協力いただいたら、事業としてうまく回る可能性があると思います。

## 愛されるまちの姿

■**嘉名**：森吉さんは日頃から、災害時の対応など、 commons を通じてまちをもう少し考え直していった方がいいとお考えだと思います。船場には働いている人がたくさんいるという特性も踏まえて、今後、まちとして持っておかなければいけない commons、性能についてアイデアをいただきたいと想います。

■**森吉**：帰宅困難者問題は、東京の大丸有（大手町・丸の内・有楽町）が熱心に取り組んでいます。東京は大阪より通勤圏が広く、普段でも通勤が大変な人がいます。それと同じことを大阪でやるのは難しいかもしれませんが、私が課題だと思うのは、公開空地をつかって手入れはしているけれども、それを本当に活かそうとはしていないことです。

ガス会社は皆様がお客様です。企業として皆様に愛されたいし、勤めている私自身、このビルが大好きです。業務をしているのでセキュリティ上の条件はありますが、いつも、社員が主体となって、皆様と一緒に考え、できるだけ皆様に使っていただきたいという気持ちでいます。

ひるがえって、公開空地にももっと多くの使い道があると思います。例えば、映画を上映したい人もいるかも知れませんが、企業ミュージアムは船場にも結構あると思います。あるいは、仕事場そのものがミュージアムかもしれません。子供たちにそれを見学してもらって、公開空地でお弁当を食べてもらってもいいでしょう。

また、船場は帰宅困難者にとって、大阪で最も物資が豊富なところだと思います。非常時には、布切れ 1 枚でも気持ちよく差し上げて、「また来てね。気をつけて帰ってね」と言って送り出せば、その人は次から、喜んでお客さんとして来てくれると思います。愛されたらまた来てくれます。船場はそんなまちになれる面を、すでに持っていると思います。そういう思いから、今年の船場まつりでは是非、船場センタービルで災害時の対応について提案をしたいと思いました。次は泊まりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

■**嘉名**：災害のために帰宅できなくなるのは仕方ありませんが、災害に対応できているビジネス街は、命を守る上でも重要です。それがまちの信頼にもつながります。森吉さんはその点にも留意して活動しておられますので、commons と連携しながら広げていくこともできるのではないかと思います。

渡邊さんにお話をお聞きして、非常に多くの活動をされていることを知りました。神社は公共空間といっても、どうやったら使わせてもらえるのか、入りにくい面もあると思います。実際に相談に行った場合、神社として可能なこと、こういうことならどんどん使って欲しいという思いなどがあれば、お聞かせ下さい。

■**渡邊**：その点は、私どもが普段、最も悩むところです。神社は半公共であるべきだと思いますが、やはり、信仰の場として見ている方、おいでになる方もたくさんおられま

すので、どんなイベントでも受け入れるわけには行かない部分もあります。ただし、信仰は強制しませんし、宗教・信仰に関心のない方でも、神社の中で何かをしているので入って来て、そこで自分の精神的な原点を見つけられる、あるいはそれに近いようなことが行われればいいと思っています。

神社としては、地域のために貢献できることであれば、できるだけ開放して行きたいと思っていますので、大いに、いろいろアタックしていただければありがたいと思います。船場にある4つの神社は、形態も中身も若干違うので、全てが当てはまるかどうかはわかりませんが、恐らく、皆さんそれに近い感覚をお持ちであろうと考えています。

### 《2010年の計画について》

■**嘉名**：どんどんアタックして、無理な場合は遠慮なく却下していただくなり、どこかを変えれば可能になるよう、調整できる部分を考えて行けばいいですね。残り時間が少なくなりました。最後に、高岡さん、梅澤さん、吉田さんに、今年の計画や、今後の抱負・アイデアがあれば、差し支えない範囲でお教え下さい。



■**高岡**：「まちのコモンズ」は、今年もさらに範囲を拡大して開催すべく、既に動き始めています。今年の課題は、イベントの趣旨と船場の素晴らしさを、誰に届けるかということです。最も分かってもらいたいターゲットは、船場に働きに来ている人、最近建ったマンションに新しく越してきた方ですが、それがなかなか難しく、情報も届きにくいし、実際に足を運んでいただける方も少ないのです。昔から船場におられる方は、町内会を介して情報も伝わり、協力もしてもらえます。あるいはもっと広域で考えると、近代建築が好きな方は遠くからでも来られます。

今年実行委員会を立ち上げ、近くの超高層マンションの住民で構成する理事会の会長さんにも入っていただくことができたので、そこを1つの突破口に、船場で新しく暮らし始めた人に、この祭りの存在を知ってもらえるように持って行きたいと思います。

■**嘉名**：今年もバージョンアップされるということですね。梅澤さん、いかがですか。

■**梅澤**：今年も、10月8日をターゲットに準備をしています。前は準備期間が3ヵ月あまりしかなかったのが、PRも不足しましたし、協力をお願いすべき連合町会さんとも



うまく連携できないなど、いろんな面で反省すべき点がありました。今年はそのようなことのないよう、地域を巻き込んで、3年計画で本物の地域の祭りにして行きたいと考えて取り組んでいます。

澤田さんのお話の中で、組織でものごとを進め

るには、「きれ者・よそ者・ばか者」が大事だとのことでしたが、きれ者とよそ者はそこそこいます。ばか者が少ないので、今後どう育てていくかが1つの課題でしょう。また、鳴海先生は、「若者・よそ者・ばか者」とおっしゃっていますが、若者もこれから大いに巻き込んでいくべきだと思っています。

■**嘉名**：ばか者を育てるのがうまい方は、是非ご紹介いただければと思います。今、船場に求められている人材が、ばか者だと思います。吉田さん、いかがでしょう。

■**吉田**：会期は5月9日の母の日にほぼ決まりました。今年はまだ難しいですが、方向付けとしては、サステナビリティのある催しにするために、お金集めから企画その他について、官のウエートを少なくして、民の方にシフトしていくのがこれからの課題です。

因みに、私がコモンズという言葉聞いたのは、東京の青山に、ベル・コモンズという有名な商業ビルができた時でした。カルチュアコンビニエンスクラブの増田宗昭社長が、関西の大学を卒業して、東京で若いスタッフと一緒に企画を提案したベル・コモンズは、流通業界にとって非常に衝撃的でした。私は若い頃、そこを何度も見に行き、百貨店の流通など空間ビジネスについて学びました。それから30年ぶりに聞いた言葉なので、船場コモンズが定着し、今後のまちづくりの核になって欲しいと思います。



### 《コモンズを船場のブランドに》

■**橋爪**：是非、「船場コモンズ」という言葉を流行らせましょう。皆さんも機会があれば、「まちコモンズ」のまちづくりではキーワードになっているらしい、とか、「コモンズ」という概念が「ノーベル経済学賞を取ったらしい」という話をどんどん広めていただければと思います。

私がこの言葉を聞いて思い出したのは、鳴海先生の博士論文「都市の自由空間」です。コモンズと似た概念ですが、残念ながら「自由空間」という言葉は流行りませんでした。まちには、そこに行くと自由になれる公共的な場所、みんなが自分の場所だと思って使いこなしている場所があります。それを「自由空間」「まちのコモンズ」などと呼び、その使いこなし方を考え、実践してゆきながら、船場コモンズという概念に託された船場のまちづくりをアピールしていかなければいけません。船場げんきの会ですから、そこに集うとみんなが元気になれるとか、そこを自由に使えるという考え方もあるでしょう。

今日は、船場コモンズをどう使いこなしていくかという点は、まだ十分に深い話ができないと思います。このテーマを、活動を通して深めていくことも、船場げんきの会の今後の仕事にしたいと思います。

■**嘉名**：今日は、人が物や道具を目の前にした時、どう動くのかということを問う問題提起が多かったと思います。commonsを考える時には、まちとしての使いこなし、振る舞いが最も重要だと思うので、継続的に考えて行きたいと思います。

私も、commonsという言葉が流行らせて欲しいと思います。今のところ、commonsをキーワードにまちづくりをしているところは、多分ありません。船場に公園が幾つあるか、道路やビルは大きいのかと問われたら、答えに窮しますが、commonsは非常にたくさんあります。22の活動グループ自体もcommonsではないかと思います。

船場のまちづくりの特徴を説明するのは大変難しく、四番バッテリーがないことが課題として語られますが、「たくさんのcommonsがあることでは、他のどこにも負けない。それはとても豊かな場所である」と答えれば非常にわかりやすく、可能性も感じられます。それを船場のブランドとして大切に、売り出していかなければならないと思います。

長時間ありがとうございました。ここでマイクを司会の方にお返しします。

■**司会**：プログラムの最後は、大阪大学名誉教授の鳴海邦碩先生に、総括コメントをお願いいたします。



#### 《総合コメント》

■**鳴海**：橋爪先生にネタをばらされてしまいました。実は、今日のテーマは私の学生時代からの研究テーマで、ずっと関心を持ってきました。30年前に出版した『都市の自由空間』という本を読んだある出版者の人から、今読んでもとても新鮮なので、その後の研究内容を付け加えて、また出版して欲しいと言われ、『都市の自由空間 一街路から広がるまちづくり』として先般、出版しました。



しかし、「今読んでも新鮮だ」ということは、30年前から何も変わっていないということにほかなりません。少しショックでしたが、公共空間の利用については、商売をしてはいけないなどいろんな問題があり、そう簡単なことではないのです。ヨーロッパにはオープンカフェがたくさんあるのに、日本にはないように、それぞれの社会の歴史や文化と関係があることは誰でも想像がつくと思います。今日のお話でも、いろいろ勉強させていただきました。

船場には戦前から、建物を少し控えて建てて、隙間をつくっていくという建築線というルールがあります。ご承知のように、御堂筋沿道では4m下がって、少し高く建てられるようになりましたが、それも、まちなみを整えるためのルールです。大昔からの太閤路地もあり、まちの中にちょっとした隙間をつくっていく仕組みが、船場には出来上がっているのです。誰も知らないけれど、これは一種の宝物ではないかと思います。

私が学生の時に自由空間を勉強したのは、「旭川買物公園」というプロジェクトでした。国道の自動車を止めて歩行者道にする実験でしたが、警察がなかなか許可せず、前夜にや

っと許可が出て、一晩でいろいろな設備を仕上げました。最終的に警察が折れたのは、ご高齢であった当時の旭川商工会議所会頭が演説をしたからです。「わが国ではまだ土農工商が残っている。商売のためのいろんな工夫や試みを、侍さんが許可しない、民主国家がこういう状態でどうするのか」。その後、歩行者天国は各地で行われるようになりましたが、公共空間で商売をするのはそれでも大変です。

当時、調べてみると、東京は市民の力が強いのか、警視庁の方が道路利用については幅広い考え方をしており、警察の方がきつい考えをもっていました。警視庁が出している研究誌には、道路をいかに開放するかという論文がたくさん載っていました。警察だけでも、警視庁と警察で考え方が全く違うなど、まだ固まった考え方がないのです。

「フーテンの寅さん」は国民的英雄ですが、彼のテキヤという商売は、警察にとっては敵です。これは変だと思います。これは、どうやら戦後の闇市に理由があるらしいことがわかってきました。戦前には当たり前だった商売の仕方が、戦後の闇市を境にスイッチが切り替わったという歴史があるのです。そういうことも参考になるのではないかと思います。公共空間で商売をするには、(1)伝統的である、(2)地域の人が主体になる、(3)ルールがある、(4)地域の役に立つという4つ条件があれば許可が出ます。例えば、京都の鴨川の納涼床は河川敷を利用していますが、伝統的なので許可されます。ですから、橋爪先生も

おっしゃるように、伝統にしていかなければいけません。



6年前、私どものグループが、大阪で社会実験『リバーカフェ SUNSET37』を行った時、書類を200枚くらい提出しました。大変ですが、200枚書けばできるとわかったのです。それを定常化していけばお祭りになり、みんなが認めてくれます。そうなるまで、執念深くやらなければいけません。

先ほど、ばか者がなかなか出てこないというお話がありました。リバーカフェの実験を行ったとき、近所の町内会のおじいちゃんがよく来られました。そして最終日のパーティのときに、「あんたらは楽しそうで、格好いい大人になっている」と励ましてくれました。今の子供たちが大人になりたいがらないのは、大人になったら大変だとわかっているからだそうです。大人が格好よければ、子供はもっと早く大人になりたいと思うはずだということです。

同じように、大人が遊んで楽しそうにしていると、ばか者がたくさん育ってくるのではないかと思います。子供たちに格好いいと思われる大人がたくさん生まれてくれればいいと思いました。以上、感想とコメントをさせていただきました。ありがとうございました。

■司会：ありがとうございました。本日は本当に熱いご議論をありがとうございました。是非、今日の議論を明日からの船場のまちづくりに役立てさせていただきたいと思います。会場の皆さまには、今後も、船場の町に、たくさんのご尽力・ご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。これをもちまして、船場げんきの会、船場フォーラム2010を閉会します。長時間ありがとうございました。